

条播栽培におけるナタネ「キラリボシ」の多収栽培技術			
[要約] ナタネ「キラリボシ」の条播栽培において、輪換畑では播種量 0.5kg/10a、基肥窒素量 12kg/10a 及び抽苔期に追肥窒素量 4 kg/10a 施用し、畑では播種量 0.5kg/10a、基肥窒素量 12kg/10a 施用することで収量 300kg/10a を達成できる。			
農業総合センター農業研究所	平成23年度	成果区分	技術情報

1. 背景・ねらい

ナタネはこれまでの試験から、県内での栽培に適した品種や条播栽培における安定収量（200kg/10a）を得るための基礎的栽培条件が明らかになっている（普通作物栽培基準参照）。そこで、地域での定着及び農業者の収益性向上を目指して条播栽培におけるナタネ「キラリボシ」の収量 300 kg/10a を安定して得るための播種量及び施肥法を明らかにする。

2. 成果の内容・特徴

- 1) 慣行に対して、基肥窒素量 12kg/10a にすることで増収するが、基肥窒素量 16kg/10a での増収効果は低い（表 1）。
- 2) 輪換畑において、追肥窒素量を 6 kg/10a に増やすことで増収する。畑では追肥を施用せずに基肥の増肥のみで多収となる（表 1）。
- 3) 播種量は慣行より少ない 0.25kg/10a で、一株あたりの生育量が増加し増収する（表 1）。しかし、播種機の作業精度及び苗立ち数確保の観点から播種量は 0.25kg/10a より 0.5kg/10a が適している（データ省略）。
- 4) 各処理を組み合わせた試験の結果、輪換畑では基肥窒素量 12kg/10a 及び抽苔期に追肥窒素量 4～6 kg/10a、畑では基肥窒素量 12kg/10a 施用することで播種量に関わらず収量 300kg/10a を達成した（図 1）。

3. 成果の活用面・留意点

- 1) 農業研究所作物研究室畑（表層腐植質黒ボク土）及び農業研究所水田利用研究室輪換畑（中粗粒灰色低地土）での結果である。
- 2) 抽苔期とは、幼葉間に花蕾が出現し、節間および花軸の伸長が開始する時期を示す。10月播種「キラリボシ」の場合、通常3月上旬頃となる。
- 3) 「キラリボシ」は野鳥による茎葉及び子実の食害を受けやすく、小面積での栽培や圃場周辺の環境によっては減収する恐れがある。
- 4) 「キラリボシ」の種子は、育成元（東北農業研究センター）から利用許諾を受けた6団体（平成23年7月1日現在）より購入できる。

4. 具体的データ

表1 「キラリボシ」の要因別生育・収量

要因	処理	苗立ち数 (本/㎡)	苗立ち率 (%)	成熟期 (月.日)	成熟期 草丈 (cm)	一次 分枝数 (本/株)	収量 (kg/10a)	千粒重 (g)	
輪換畑	基肥窒素量 (kg/10a)	8(慣行)	98	73	6.08	118	4.6	275	3.40
		12	91	68	6.10	125	4.7	335	3.36
		16	96	70	6.10	129	5.2	335	3.34
	追肥窒素量 (kg/10a)	4(慣行)	95	70	6.09	124	4.8	305	3.39
		6	95	71	6.09	124	4.9	325	3.34
		播種量 (kg/10a)	0.25	51	75	6.09	130	6.0	330
畑	基肥窒素量 (kg/10a)	0.5(慣行)	99	72	6.09	123	4.6	304	3.35
		0.75	135	65	6.09	119	3.9	311	3.42
		6	73	67	6.12	139	4.9	261	3.44
	追肥窒素量 (kg/10a)	9(慣行)	73	65	6.13	143	5.6	316	3.35
		12	71	63	6.13	149	5.9	352	3.38
		播種量 (kg/10a)	0.25	53	60	6.13	146	6.2	328
0.5(慣行)	91	69	6.13	141	4.8	291	3.38		

注)データは H20・21 播種の要因別平均値。全試験区で倒伏・病害(菌核病)は問題とならなかった。

<耕種概要> 以下図1も同様

輪換畑・・・播種期:10/14・10/20、播種様式:条播(条間 30cm)、追肥は中苔期(3/2・3/5)に施用した。

畑・・・播種期:10/20・10/28、播種様式:条播(条間 30cm)

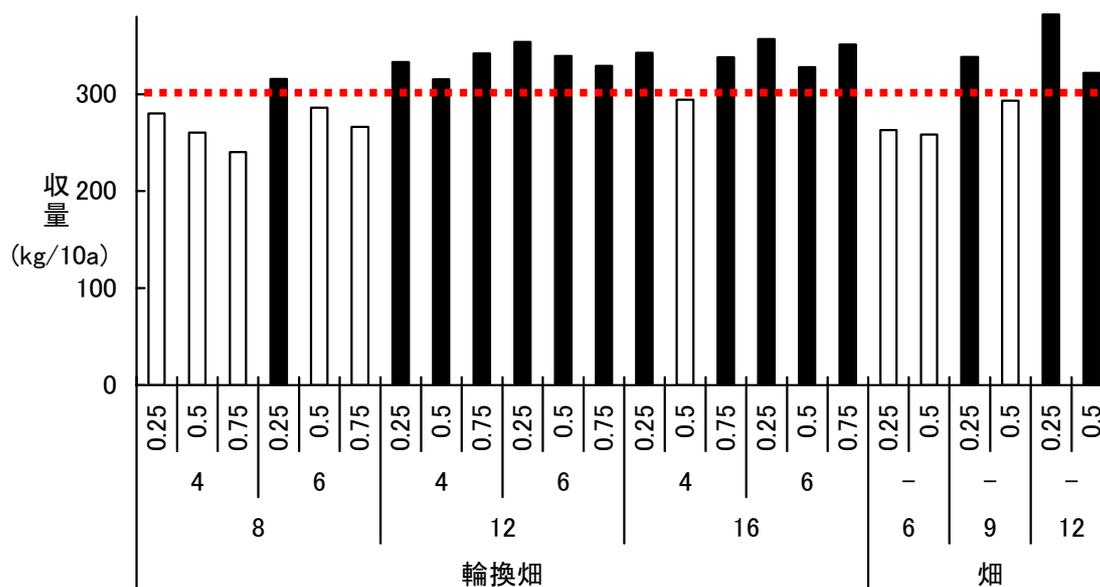


図1 「キラリボシ」の収量

注)データは H20・21 播種の各試験区の平均値。収量が 300kg/10a を達成した試験区を黒塗りとした。

横軸: 下段から田畑の種類・基肥窒素量(kg/10a)・追肥窒素量(kg/10a)・播種量(kg/10a)

5. 試験課題名・試験期間・担当研究室

バイオエネルギー利用のためのナタネ・ヒマワリ等油糧作物安定栽培技術の確立・平成 20～平成 22 年度・水田利用研究室、作物研究室